石油・天然ガスに大きな期待

動き出した北極開発

氷山、永久凍土、ツンドラ、白夜、犬ゾリ――茫漠たる〝無の世界〟のイメージに包まれたカナダ北極。この厳寒の地に、いま開発の槌音が響いている。厚い氷に閉ざされた海上に掘削船や人工島が浮かび、デルタ地帯には、いくつもの掘削機（リグ）が立ち並ぶ。ボーフォート海だけでも埋蔵量およそ一千億バレルと推定されている石油・天然ガスを開発しようというのだ。開発の足音は、大陸の沿岸だけでなく、さらに北の、北極海諸島にまで及んでいる。カナダ北極は、ながい眠りからさめて、開発への道を大きく歩み出した。――北極開発の歴史と現状を、開発以外の話題や環境保全への考慮をとりまぜつつ、お伝えしよう。

脚光浴びるボーフォート海

数年来世界を襲った一連の石油ショックは、カナダにも大きな打撃を与えた。そのショックから立ち直った今、カナダ人はエネルギーの節約に力を入れている。だがそれだけでは十分でない。国民の生活水準を遠い海外の石油事情に翻弄させないためには、新しいエネルギー源を見つけなければならない。

北西準州のボーフォート海＝マッケンジー・デルタ一帯は、この国民的課題に応えようとする人びとの挑戦の場である。

今日、カナダ人の中にはこの開発熱を疑問視する声がないわけではない。ボーフォート海とその周辺デルタ地帯の探査・掘削について、国民の間に懸念する向きがあるのは事実である。

しかしながら、北辺の海にそそり立つ掘削リグは、カナダの未来を確保するひとつの手段であり、この国のエネルギー自立度を今世紀のうちにできるだけ高めるための重要な方途であることは確かである。環境と住民の生活を守りながら資源の開発を進めていく――これがカナダの考え方である。

カナダ北極で初めて石油を発見したのは、探検家アレクサンダー・マッケンジーである。一七八九年七月二十四日の朝、カナダ内陸から「西の大海」（太平洋）を求めてカヌーの旅を続けていたマッケンジーは、北極海へ通じる川（のちにマッケンジー川と命名された）の川べりで、スレート状の地層を認めた。インディアンが、火打ち石を集めていたところである。そのときの模様を、彼は日記にこう書いた。

「小石の間に、石油に似た黄色いワックス（ろう）を発見。ワックスよりはもろい。」

だが、このとき彼が求めていたのは毛皮であった。マッケンジーは、石油に特別の関心を払うこともなく、川をさらに下っていった。

北極石油が脚光を浴び、マッケンジーの名が思い起こされるようになるのは、それから何十年もたってからのことである。

マッケンジー以後も、北西準州の石油に気づいた探検家は何人もいた。早い時期に最もはっきりと油田開発の可能性を予言したのは、一八八七―八八年に現地に赴いたカナダ地質学調査隊のロバート・G・マコーネルである。彼は連邦政府に次のような報告書を送っている。「マッケンジー川流域は、ほぼ全域にわたって〝オイル・カントリー〟の可能性があります。開発はすぐにはいかないでしょう。しかしそれは時間の問題にすぎません。」

ノーマン・ウェルズで油井第一号

現実に掘削機がこの流域の厚い凍土を掘り始めるのは、カナダに最初のガソリン自動車が走ってからざっと十二年もたった一九一九年のことである。掘削を開始したのは現在のインペリアル・オイル社の遠い前身ノースウェスト社。同社は、マッケンジーが黄色いろう状の物質を見つけた場所からほど遠からぬ北西準州ノーマン・ウェルズで油層にぶつかった。北緯六十度以北における油井第一号であった。

ノーマン・ウェルズでは一九三二年以降生産に入り、可採埋蔵量五億バレルの

北極海諸島

カナダ北方に巨大な流氷群のように浮かぶ北極海諸島。群島としては世界最大（約二百万平方キロで日本全体の五～六倍）の面積をもつ北極海諸島は、石灰岩の高原、入り組んだ海岸線、氷の〝砂漠〟など変化に富む地形をなし、十二月から二月までは一日たった二、三時間、ほんのりと微光がさすだけという。北米